三大寺家旧蔵「高野大師行状絵」考

―藪本家本を中心に―

塩出貴美子*

要旨

本稿は、三大寺家旧蔵「高野大師行状絵」について、先に発表した二編の論考[注1]の続編である。前稿では、三大寺家旧蔵本および本来はこれと一具の絵巻であったボストン美術館本を一括してA本と称し、その全体に関わる問題点を整理した後、逸翁美術館所蔵の第一巻および総持寺所蔵の第二巻について、類本との図様比較を中心とする検討を加えた。引き続き本稿では、まず、藪本家が所蔵する第三巻の図様を検討する。次いで、第三巻には詞書の異同が比較的多いことに注目し、前稿1では簡単にしか触れなかったこの問題を再検討する。なお紙数の都合上、三大寺家旧蔵本のうち残る第四巻と第五巻の検討は別稿に譲ることとし、本絵巻全体についてのまとめもそこで行うこととする。[注2]

一　図様比較

ここでは、A本第三巻の図様を類本と比較する。比較対象には、前稿までと同じく地蔵院本[注3]、白鶴美術館本を用い、新たにフリア美術館蔵「弘法大師伝絵巻」[注4]（以下、フリア本と称する）を加える。なお、第一巻で用いたB本（堂本家本と久松家旧蔵本）には、A本第三巻と同じ事蹟は残っていない。

さて、A本第三巻は、次の八段で構成される（数字は段を示し、事蹟の名称は各段標題による）。

1「渡天見仏事」　2「在唐入壇事」　3「珍賀怨念事」
4「守敏遣護法事」　5「道具相承事」　6「恵果御入滅事」
7「恵果影現事」　8「投三鈷事」

これは地蔵院本の第三巻と全く同じ構成である。また、白鶴美術館本は第八段まではこの二本と同じであるが、九段目に目次には記載のない「著岸上表」が加わる点が異なる。この事蹟はA本では第四巻第一段に見られるが、地蔵院本には収録されていない。このように第三巻は、第一巻や第二巻に比べれば、地蔵院本および白鶴美術館本との構成上の異同が少ない。一方、フリア本は二巻四段からなる端本で、その内容はA本の第三巻第一段から第四段までに相当する。ただし構成に異同があり、A本との対応は次の通りである。

〈フリア本〉	〈詞書〉	〈絵〉
上巻第一段	A本第一段	A本第一段
第二段	同　第二段前半・第四段	同　第四段
下巻第一段	同　第二段後半	同　第二段
第二段	同　第三段	同　第三段

つまりフリア本は、A本の2「在唐入壇事」の詞書を前半と後半に

平成7年9月30日受理
*美術史研究室

分かち、その前半部に4「守敏遣護法事」の詞書を続ける。この接続は同一料紙内で行われており、後世の錯簡ではありえない。絵は「在唐入壇事」に対応する内容が下巻第一段に、「守敏遣護法事」に対応する内容が上巻第二段に描かれている。詞書と絵の間にはそれぞれ紙継がある。内題、目次、各段標題はなく、少なくとも標題は当初からなかったと推定される。その点で、各段標題を有する他三本とは形式が異なるが、制作年代は十三世紀末から十四世紀初頃と推定され、A本に先行する作品の一つとして考慮することは決して見当違いではないであろう。

では、第一段から順に見ていくことにしよう。(注5)

1「渡天見仏事」（図1）

在唐中に、大師は神童に勧められて霊鷲山に到り、釈迦の真容を拝するという事蹟を表す。

A本は詞書通りに、①大師が神童に出会う場面、②神童とともに白馬に乗る場面、③同じく青羊に乗る場面、④夜叉神の付き添う飛車に乗る場面、⑤霊山の麓で老翁に出会う場面、⑥鉢に導かれる場面、そして最後に⑦仏菩薩を礼拝する場面、以上七場面を長大な連続画面構成で描く（図1）。地蔵院本と白鶴美術館本も同様であるが、三者を見比べると、A本は④の飛車に天蓋が付いていること、⑦の聖衆が多いこと、以上二点で他二本とは大きく異なる。また背後の風景も地蔵院本と白鶴美術館本に相似性が強く、A本は異同が多い。

しかし、④の飛車を乗せる雲が霊芝雲であること、⑤の鉢に放射光が表されていること、この二点はA本と地蔵院本が共通する。白鶴美術館本では、雲は周囲の山にかかるすやり霞と同じように薄墨の輪郭線で縁取られており、鉢は光を発していない。この鉢については、詞書に「光を放て路を示す」という一節があり、前二者の方が詞書に忠実な表現である。ところが、地蔵院本の鉢は金色であるのに対し、他二本はともに濃墨を塗る。したがって三者の関係は、概して言えば地蔵院本と白鶴美術館本が相似し、部分的にA本が異なるように見えるが、A本のモチーフの中には、僅かではあるが地蔵院本とのみ、あるいは白鶴美術館本とのみ共通する描写もあり、三者を一直線的な関係で捉えることは難しい。

一方、フリア本も同様の場面を描くが、⑤⑥は失われている。(注6) 画面は長くゆったりとした構成で、②③の間には鬼神や猛獣などの添景も描かれる。また、場面の内容にも異同が多く、①では大師が建物の中にいるほか、神童の背後に既に②で乗る白馬が現れている。②では神童が大師を背負ったまま白馬に乗っている点が、他本には見られない表現として注目されるが、これは詞書の「神童大師をおひたてまつりて、この馬にのる」を文字通り絵画化したものである。③では神童の姿はなく、大師一人が青羊に乗っている。また、④は三場面からなり、A本等と同じ場面の前後に、飛車が大師を待ちうけているところと大師が下りた後の飛車が描かれている。夜叉の数も多い。飛車は無蓋で、A本ではなく地蔵院本、白鶴美術館本と同じ形である。⑦は聖衆が少なく、余白の多い構成となる。このようにフリア本の図様は他本とは異なるところが多く、A本との関連も特には認められない。

2「在唐入壇事」（図2・3）

青龍寺の恵果和尚を訪ねた大師は、胎蔵界、金剛界、伝法阿闍梨位の灌頂を次々に授けられ、五百の僧に斎供を儲けたという事蹟、その後、恵果から早く帰国するように勧められたという事蹟を表す。

A本は建物を基調とした簡潔な構成の中に、①大師が恵果にまみえる場面、②斎供の場面、③恵果が大師に語りかける場面を配する（図2）。中央にある②が最も人数が多く、大がかりな場面であるが、ここには大師の姿は見あたらない。一方、白鶴美術館本は灌頂の儀式のために堂に向かう僧列と見物の人々を描いており（図3）、A本とは

全く異なる図様である。なお天蓋を差しかけられているのは大師ではなく、恵果である。[注7] 地蔵院本は見物の人々を欠くが、そのほかは白鶴美術館本にほぼ一致する。

フリア本は長大な画面に、①恵果と大師が入堂する場面、②斎供の場面を描く。そのうち①の行列から前半部分を抜き出すと、地蔵院本および白鶴美術館本と相似した場面になる点は興味深く思われる。②はA本の②と同じ内容であるが、描かれている人数が圧倒的に多く、構図は全く異なる。画面の最後に描かれた壇上に恵果の姿が見えるのもフリア本だけである。

したがってA本は、事蹟内容にはフリア本との共通性が部分的に認められるが、図様は何れとも異なり、独自に構成された観が強い。この段の主題である灌頂に直接的に関わる場面が描かれていない点に物足りなさが感じられるが、①③とも他本にはない場面であり、このような恵果との関わりを重視した場面を選択している点に、この段の特徴が見られる。

3「珍賀怨念事」（図4）

大師の受法に反対した珍賀は、夢の中で四天王に責められ、翌朝、大師に謝罪するという事蹟を表す。

A本は画面の右に①珍賀が四天王に責められる場面、左に②珍賀が大師に謝罪する場面を描く（図4）。白鶴美術館本も同様の二場面を描くが、建物の構造が異なるほか、各モチーフの描写にも異同が多い。①では、例えばA本の珍賀は寝台に仰向けになっているが、白鶴美術館本では床に伏せた姿であり、四天王の動きも相違する。②では、A本は大師と珍賀を堂内に描くが、白鶴美術館本は大師と恵果を堂内に描き、珍賀は外で地に伏している。詞書には「大師の御許に参て、五体を地に投て三拝し」とあり、珍賀を堂外に描く白鶴美術館本の方が適切な表現であるが、恵果が描かれる必要はなく、この点はA本の方が適切である。また①②の間には、A本は広い余白を設けるが、白鶴美術館本は樹木を添え、自然景での接続を図る。地蔵院本は樹木だけでなく下草を添えるが、そのほかは白鶴美術館本にほぼ一致する。

一方、フリア本は事蹟の後半部、すなわち珍賀が大師に謝罪する部分の詞書を欠落しており、絵も描かれていない。詞書の最後の行は中程で終わり、その後に余白が残されているので、制作当初からこの状態であったことは明白である。後半部は別の段に仕立てられていた可能性も考慮されるが、現状では確かめる術がない。①に相当する場面は、建物は白鶴美術館本を左右反転させたものに相似するが、珍賀は脇息にもたれて眠っており、やはり他三本とは異なる図様である。樹木等の描き込みも多い。

右のようにフリア本が後半部を欠落する点を除けば、この段は四本とも同じ場面を描いている。しかし、地蔵院本と白鶴美術館本がほぼ一致するほかは、図様の相似性は希薄である。

4「守敏遣護法事」（図5・6）

山階寺の守敏僧都は大師の受法を盗聴しようとして護法を遣わし、胎蔵界の時は成功するが、金剛界の時は大師が結界したために護法が近付けなくなって、失敗するという事蹟を表す。

A本は画面の右に、①胎蔵界受法の場面、左に、②金剛界受法の場面を描く[注8]（図5）。白鶴美術館本も同様の二場面を描くが、大師と恵果の配置や建物の様子、護法の容貌等に相違が見られる（図6）。例えば、①の場面を吹抜屋台で描くのはA本だけである。しかし、最も大きな相違は②の場面において、A本は「護法ちかづくことをゑず」を護法を描かないことで暗示するのに対し、白鶴美術館本は振り返りながら帰って行く護法の姿で明示する点である。地蔵院本は樹木草花を添えるが、そのほかは白鶴美術館本にほぼ一致する。

ところで、右の三本では、標題と詞書の一行目に登場する「守敏」

の名が、もう一度詞書に出て来る時には「修因」となり、この間に錯誤が生じている。フリア本は二度とも「修因」で統一するが、かわりに「金剛界」と「胎蔵界」の名を逆にするという誤りを犯している。したがって詞書通りに見れば、画面右が①金剛界受法の場面、左が②胎蔵界受法の場面となる。①では、部屋の外に鬼に似た容貌の護法を描き、盗聴の成功を表す。フリア本の構成は他三本とは大きく異なり、①②の間に小川の流れる風景が展開するが、②の護法は、その小川に架かる橋の右側から②の場面を遠く窺うような姿勢で描かれている。ただし、この護法は確かに②の場面に近付いてはいないが、その足は歩く動作を表しており、これから近付くところのようにも見えるので、この点では、他三本の方が事蹟内容を的確に表していると言えよう。

5「道具相承事」（図7・8）

恵果が大師に本尊道具等を付属（譲渡）するという事蹟を表す。

A本は堂内で対座する恵果と大師を描き、その右手前に僧一人、左手前に仏具等を整理する僧二人を添える[注9]（図7）。恵果の手にあるのは「祖師相伝のたから」という「鍵陀穀子の袈裟」である。白鶴美術館本も同様の場面を描くが、恵果と大師の配置や堂の向きは左右逆である（図8）。堂内には、恵果と大師のほかに僧二人と童子一人がいるが、A本のような仏具等を整理する場面は描かれていない。この点で、A本の方が事蹟内容を詳しく絵画化していると言えよう。地蔵院本は白鶴美術館本にほぼ一致する。

6「恵果御入滅事」（図9・10）

唐貞元元年十二月十五日、恵果入滅すという事蹟を表す。

A本は涅槃図に準じた構成で、恵果入滅の場面を表す（図9）。恵果は頭を左にして寝台に横臥し、悲嘆に暮れる僧俗多数がこれを取り囲む。寝台の手前、恵果の頭に最も近い位置にいて、袖で顔を半ば覆っているのが大師である。白鶴美術館本も同様の場面を描くが、恵果は寝台ではなく、袈裟を敷いた上に横臥する（図10）。また、周囲を取り巻く人物は半減し、A本との対応関係は認められない。恵果の足元近く、ちょうど柱に隠れる位置にいるのが大師である。ともに涅槃図を念頭においているため、一見類似した構成のように見えるが、主題以外に共通性はなく、両者は別の図様である。地蔵院本は白鶴美術館本にほぼ一致し、周囲の人物も一人一人を対応させることができるが、右端の壁に半身を隠した人物は地蔵院本だけに見られる。

7「恵果影現事」（図11）

恵果入滅の夜、道場で持念する大師の前に恵果が現れ、互いに師資相承を約束された間柄であることを説くという事蹟を表す。

A本は吹抜屋台で表された堂内に籠る大師と、裾を翻し、まるで宙に浮いているかのような恵果を描く[注10]（図11）。影現という非現実さを表すためか、恵果は大師よりもやや小振りに描かれている。傍らの灯火が夜を暗示する。白鶴美術館本も同様の場面を描くが、恵果は座像で、A本よりも比率的にもっと小さく描かれている。また、堂は吹抜屋台ではなく、向きも異なる。地蔵院本は堂の傍らに竹叢を添えるが、そのほかは白鶴美術館本とほぼ一致する。

8「投三鈷事」（図12）

帰朝を前にして、明州の港で「我習ところの秘教、もし相応の地あらば此三鈷とびいたりて留まるべし」と誓願を発し、日本の方に向かって三鈷を投げるという事蹟を表す。

A本は、画面中央に三鈷を投げた直後の大師を、その左上方に雲に乗って飛んで行く三鈷を描く（図12）。大師は右手を振り挙げ、大見栄をきるような姿で左手の指先にまで力を込めており、そこに誓願への強い意志が感じられる。大師の後方、画面上では右の位置に、僧俗の四人物がおり、さらにその後方に大きな松の木が二本ある。

白鶴美術館本も画面中央に大師を描くが、振り挙げた右手にはまだ

三鈷が握られており、これから投げようとする場面である。しかし、左上方には既に雲に乗って飛んで行く三鈷が描かれており、異時同図を用いた説明的な構成になっている。また、大師の背後の人々は数を増し、画面右端には第三巻の4「御入唐事」および5「着福州事」に見られたような建物も描かれている。このようにA本とはかなり異なる図様であり、力強さも欠ける。地蔵院本は、他の段に比べると、浜辺の形態や添景の船の位置などに異同が多いが、大要は白鶴美術館本に一致する。

右の結果から、まず、A本と白鶴美術館本の関係をまとめてみよう。場面の内容に相違があるのは2「在唐入壇事」と8「投三鈷事」の二段である。特に前者は、A本が恵果と大師の関わりを重視した場面選択を行っている点に特徴があり、場面内容も図様も全く異なるものとなる。後者は一見同じ場面のように見えるが、白鶴美術館本はこの段の最も重要なモチーフである三鈷を二度描き、時間の経過を含んだ説明的な構成をとる。第二巻では、5「着福州事」に代表されるように、A本の方が意図的に「逐次的な構成」をとり、事蹟内容を説明的に表す傾向があったが、ここはその逆である。

右の二段以外は、両本とも同じ場面を表す。ただし、A本の5「道具相承事」では、仏具等を整理する僧によって、白鶴美術館本よりも豊かな内容が表されている。しかし、何れにしても各モチーフの描写には異同が多く、例えば、第三段から第七段までに描かれた建物を見ると、構図や細部描写に共通性が認められるものは皆無である。また、同じ人物を描いていても、その配置は異なる場合が多い。したがって、構図全体に多少なりとも相似性が認められるのは、屋外を舞台とする1「渡天見仏事」だけである。

次に、地蔵院本に注目すると、全段を通じて大要は白鶴美術館本に一致するが、細かな異同を挙げるならば、2「在唐入壇事」と6「恵果御入滅事」の人物の出入、3「珍賀怨念事」、4「守敏遣護法事」、7「恵果影現事」の樹木草花等の付加、また8「投三鈷事」の浜辺の形態等が挙げられる。しかし、これらの異同はA本を含めた三者の関係に対しては何の手がかりも与えない。なぜならA本は、地蔵院本と白鶴美術館本の異同以上に、2「在唐入壇事」では内容的に、その他の段では構図的に大きく異なっているからである。だが、1「渡天見仏事」で指摘した④の場面の飛車の雲と⑤の場面の鉢の放光は、いささか事情が異なる。これは、先述の如く地蔵院本とA本が共通し、白鶴美術館本が異なる表現の例であり、ここでは、白鶴美術館本を超えた地蔵院本とA本の連関が想定される。しかし一方、⑤の鉢の色は白鶴美術館本とA本が共通し、地蔵院本が異なっているので、地蔵院本以降における、白鶴美術館本とA本の連関を考慮すべきであろう。

フリア本は、他三本に比べ、概して独自性の強い画面を構成している。A本との関係では、2「在唐入壇事」において、ともに斎供の場面を描いていることが注目されるが、共通するのは場面選択だけで、画面構成は大きく異なる。しかし、A本以前の作品で、この斎供の場面を描いているのはフリア本だけであり、その点では、やはりフリア本の存在は無視し難い。

右のことから、A本第三巻の図様については、次のことが言える。まず、1「渡天見仏事」については、地蔵院本と白鶴美術館本の関係ほどではないが、A本にもこれら二本との相似性が認められる。次に、2「在唐入壇事」は地蔵院本や白鶴美術館本には見られない独自の場面を表しており、その一部はフリア本と内容的に共通する。その他の段は、場面の内容は白鶴美術館本等と同じであるが、画面構成は全く異なり、独自に構成されたものと推定される。また、8「投三鈷事」では、場面の内容にも多少の異同が生じている。

さて、右の結果を第一巻および第二巻の場合と比べてみよう。第一巻では、4「誓願捨身事」と7「大瀧嶽事」の画面全体に、また2「幼稚遊戯事」ほか四段の一部に白鶴美術館本との相似性が認められた。そのうち六巻本との共通事蹟については、同様に地蔵院本との相似性も認められる。しかし第二巻では、画面全体が相似するものは皆無であり、1「天狗問答事」ほか五段のモチーフの一部に微かな相似性が認められるにすぎない。さらに第三巻では、右の如く、相似性があるのは1「渡天見仏事」のみである。それ以外の段は全て地蔵院本あるいは白鶴美術館本とは関係なく、独自の図様を構成しているように見える。前稿1では、導き出されたいくつかの理由から「白鶴美術館本が地蔵院本の（原本）の比較的忠実な増補本であったのに対し、A本は同じ③系統（十巻本系統）の作品でありながら、他本の要素を取り込み、さらに独自の改変を加えた改訂版」として位置づけられるであろうことを述べたが、そこで言う「他本」にはB本やフリア本を宛てることができるであろう。ただし、この関係を直接的なものと見るのは難しく、何らかの間接的なものと想定しておきたい。また「改変」の度合は、第二巻、第三巻と巻を追うごとに深まっていくように思われる。しかし、第二巻の改変について指摘したような「逐次的な構成」への傾倒は、第三巻にはあまり見あたらない。

ところで、A本第三巻の第二段から第七段までは、何れも唐の寺院を舞台とする場面であるが、そこでは異国情趣を醸し出すために、他の巻には見られない表現が用いられている。[注11] すなわち禅宗様式を取入れた花灯窓のある建物が多用されているのである。地蔵院本および白鶴美術館本においても、これらの段では、例えば柱を朱塗りにするなど、日本の寺院とは異なる表現が意識的に用いられているが、[注12] A本のように花灯窓のある建物を描く例は類本にはなく、これはA本の特徴として注目される。

また、A本第三巻では、2「在唐入壇事」、3「珍賀怨念事」、7「恵果影現事」の三段に吹抜屋台の表現が見られる。現存するA本の中では、このほか第一巻の1「誕生事」と2「幼稚遊戯事」に同様の表現が見られる。決して多いとは言えないが、地蔵院本および白鶴美術館本[注13]では、第一巻第一段「誕生事」にしか用いられていないことを思えば、これもA本の特徴の一つと言えるであろう。なお、フリア本では「在唐入壇事」の斎供の場面に、また前稿1で言及したB本では「四天王執蓋事」の最後の場面、すなわち他本にはない独自の場面にだけ吹抜屋台が用いられている。このような建築表現の特徴については、様式的な問題として、いずれ機会を改めて検討することにしたい。

最後に、前稿までと同じく、A本と東寺本の関係を見ておこう。A本第三巻全八段のうち、東寺本に収録されていない事蹟は1「渡天見仏事」のみである。他の七段については、場面の過不足はあるものの、ほぼ同様の内容が描かれている。その中で、この両者だけに共通する要素を抽出してみよう（東寺本の3－5は第三巻第五段の略、以下同）。

2「在唐入壇事」と東寺本3－5「青龍受法」　東寺本は、①大師が恵果にまみえる場面と、②斎供の場面を描く。図様は全く異なるが、場面内容はA本の①②と同じである。特に①は他本には見られない場面である。②はフリア本にも描かれているが、図様はやはり異なる。

5「道具相承事」と東寺本4－4「恵果付属」　同じ場面を描いており、大師と恵果は左右反転させれば相似た構図になる。右に控える僧一人と、左で仏具等の整理をしている僧二人にも、モチーフとしての共通性が認められる。

6「恵果御入滅事」と東寺本4－5「石碑建立」　東寺本の冒頭に描かれている恵果入滅の場面と比較すると、恵果が寝台に横臥してい

る点と大師の座る位置に共通性がある。周囲を取り巻く人々は対応していないが、地蔵院本や白鶴美術館本には描かれていなかった俗人が加わる点にも、A本と東寺本の共通の特徴が見られる。

僅か三例の、それも部分的なものではあるが、右のように看過し難い共通性が認められる。前稿までの例と考え合わせ、やはりA本を東寺本が参照にした先行本の一つと考えておきたい。

二　詞書比較

ここでは、A本の詞書を類本と比較する。比較対象には、これまで図様比較に用いてきた地蔵院本、白鶴美術館本、B本およびフリア本を用いる。このうち、地蔵院本および白鶴美術館本との異同については、前稿1でも検討しており、その要点は左記の通りである。

1　地蔵院本と白鶴美術館本は、内容はもとより漢字と仮名の異同、送り仮名や助詞の出入など表記上の微細なところまで一致する度合が極めて高い。これに対し、A本は内容には大差ないものの、表記にも文言にも比較的異同が多い。

2　十巻本における増補事蹟については、表記上の異同は多少あるものの、顕著な異同は殆どなく、A本と白鶴美術館本の親近性は明らかである。

3　右の二点からは、地蔵院本→白鶴美術館本→A本という流れが導き出されるが、例外的に白鶴美術館本にだけ異同が生じている場合もある。このような異同は、白鶴美術館本とは関わりなく、地蔵院本とA本に直接的な関わりがあることを示唆する。

しかし前稿1では、紙数の都合により詳細は省略せざるを得ず、充分な考察を加えることができなかった。そこで本稿では、比較的異同の多い第三巻を中心に、この三者の関係をもう少し詳しく検討し、前稿の結論を補足することにしたい。B本とフリア本については、その後で検討する。

さて、A本と地蔵院本および白鶴美術館本の比較に際して留意すべき重要な点は、A本と白鶴美術館本が属する十巻本系統は、地蔵院本に代表される六巻本系統を増補して成立したと推定されることである。この点については、梅津次郎氏の論証があり、[注14] さらに筆者も別の観点から、白鶴美術館本よりも地蔵院本の図様に先行性が認められることを検証して、梅津氏の増補説を支持したことがある。[注15] したがって、この三者については、地蔵院本が他二本に先行するという関係が前提として考慮されなければならない。ただし前稿1でも述べたように、現存する地蔵院本自体は、第一巻は江戸時代の模本であり、第二巻以降も白鶴美術館本より制作時期が降る転写本である可能性が高い作品である。しかし、六巻本の完本は他になく、ここでも地蔵院本をその原本の代用とすることを断わっておく。

A本の第三巻までに所収されている事蹟のうち、十巻本における増補事蹟は第一巻の7「大瀧嶽事」と8「伏悪龍事」、第二巻の3「渡海祈願事」、以上三段のみであり、他は全て六巻本との共通事蹟である。まず、数の少ない増補事蹟に注目してみよう。例えば第一巻の8「伏悪龍事」を校合すると、左記の如くになる。なお、校合結果の表記は次の通りとする。

・改行は原本の通りとし、漢字は現行の字体に改めた。句読点は筆者による。

・異同がある箇所に傍線を引き、地蔵院本の字句を右に、白鶴美術館本の字句を左に示した。「ナシ」は傍線部の字句がないことを示す。

・A本に脱字がある場合は、その箇所に「・」を加え、右に地蔵院本の字句を、左に白鶴美術館本の字句を示した。

①第一巻8「伏悪龍事」（全文）

或伝・云室・戸の崎に持念したまふとき、
夜な〳〵海中より毒龍并にさま〳〵の
あやしき類数もなくをそひ来て妨を
なさむとせしかば、大師つばきをはきて
かれらを伏したまひき。海浜の砂・に
はきつけ給へば、衆星のつらなれるが
ごとくにして光輝赫然たり。異類お
それをなしてこと〳〵くに隠没しき。

漢字と仮名の異同、送り仮名や助詞の出入のほか二箇所に脱字が見られるが、2で述べたように両者は殆ど同文である。他の二段については省略するが、結果は同様である。右のことから、両者の関係は、一方が他方を写したか、あるいは共通の母胎から派生したか、何れにしても同根に連なるものであると推測される。

次に、六巻本との共通事蹟ついては、第三巻から異同の顕著な部分を抄出し、校合することにしたい（一部は前稿1で挙げた例と重複する）。

②第三巻1「渡天見仏事」（二十五〜二十七行目）

生仏不二の観をなさば蓋障をはらひて
色身を拝・せむ。※1・微風同て樹を動・す。地ふるふ
ごと水・上の船に似たり。香雲谷に満り。

※1・2　于時山ひゝく事、雷中の雷の如し（傍線部は白鶴美術館本では「時に」「ごと」となる）

③第三巻6「恵果御入滅事」（十二〜十六行目）

則唐の永貞元年十二月十五日、蘭湯にあかを
すゝぎ・、手に法印を結て、北首右脇にして円
寂に帰し給・。昔釈尊の化をやめ給し、赤・檀
の春煙むなしく痛み、今和尚の寂に帰する、
青龍・の夜の月独・悲ぶ。

④同前（二十三〜二十四行目）

試・此を論ぜむ、不滅は法也。おちざるは
人也。其法誰か悟る、其人いづくにかあるや。

⑤同前（四十〜四十一行目）

貧をすくふに財をも・てし、

愚をみちびくに法をも・てす。

⑥同前（八十七行～八十九行目）

久逗留する事なかれ、我さきに
ありてさりなん。潛にこの言を顧に、進退
我・能にあらず、去留我・師にしたがふ。

⑦第三巻7「恵果影現事」（三～五行目）

まのあたり宛然として現前し給へり。多生の
中にたがひに・師資となりて、常に密蔵
を弘演す、たゝこのたびのみにあらず。

※1・2　前にしての給く、汝しらずや、我と汝と昔の誓誠に深し（傍線部は白鶴美術館本では「立」となる）

※3・4　誓て密蔵を弘演す。世々に互に

⑧同前（七～十行目）

我ねむごろに汝を待て、此教をさづく。我
願・すでに満す。汝が望み又足ぬ。こゝにしては
汝我室に入、かしこにしては我汝が弟子と
なるべし、とねんごろにかたらひ給き。

※1・2　汝は西土にして我が足をいたゝく。我は東にむまれて汝が室に入べし。久しくとゝまる事なかれ。我さきにありてさらん、との給き。（傍線部1・2は白鶴美術館本にはなし。同3は「む」となる）

⑨同前（二十四～二十七行目）

契をむすびて、世々に知識となりて生々
に・法をひろめんといふ。彼・日珠月鏡は顕教
をひろめては・馬鳴龍樹とあらはれ、密
教を伝ては龍猛龍智となづく。

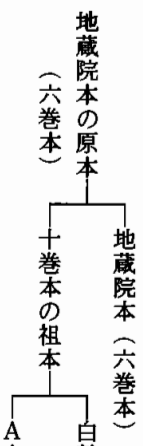
⑩同前（三十～三十四行目）

皆これ宿願のいたすところ、誓約の
しからしむるにあらずや。昔の世すでに
かくのごとし。今の時、豈しからざらむや。
蛇にあらざれば、蛇の足をしらずといふ。心あ
らむ人、尋て信をとるべきものなり。

②の※1・2、⑦の※3・4等はA本が他二本にある文言を漏らした例、⑦の※1・2、⑧の※1・2等はA本だけが異なる文言になる例、そして⑩の二～三行目にかけてはA本だけが別文を挿入する例である。また、漢字と仮名の異同、送り仮名や助詞の出入に注目すると、地蔵院本あるいは白鶴美術館本にだけ異同が生じている場合も勿論あるが、1で指摘したように、A本だけが異なるという例が圧倒的に多いことがわかる。このようにA本の詞書に独自性が強いことは明白であり、濃密な親近関係を見せる地蔵院本と白鶴美術館本の間に、これを位置づけることは不可能である。

ところが、3で指摘したように、白鶴美術館本にだけ異同が生じている場合もある。右に挙げた中では、③の三～四行目、④と⑤、⑥の一行目等に、白鶴美術館本が他二本の文言を漏らした例が見られる。[注16] これらは、A本に独自性が強いという全体的な傾向の中では、むしろ例外的な存在であるが、同様の例は他の段にも幾つかあり、無視することはできない。したがって、A本に独自性がある先の例に準じて考えれば、ここでは地蔵院本とA本の間に白鶴美術館本を位置づけることも、また不可能であると言わなければならない。

右のことは、A本と白鶴美術館本の関係は、一方が他方を写したといった直線的なものではなく、共通の母胎、すなわち地蔵院本（の原本）から派生した並列的なものとして捉えるべきであることを示唆する。しかし、増補事蹟における両者の共通性に注目するならば、この二者が全く別個に派生したとも考え難い。なぜなら、先述の如くA本と白鶴美術館本の詞書は殆ど完全に一致しており、さらに図様においても、第一巻7「大瀧嶽事」はほぼ全体的に、同8「伏悪龍事」と第二巻3「渡海祈願事」は部分的に相似性が認められるからである。[注17] さて、前稿1では「現存しない作品への推論」は敢えて控え、後の検討課題としたが、ここでようやく、この「両者の共通性」の源泉として、両者に先行する「十巻本の祖本」の存在を想定することにしたい。これを図式化すると、次のようになる。



このように考えると、増補事蹟における両者の共通性は「十巻本の祖本」に帰せしめることが可能になる。一方、六巻本との共通事蹟については、例えば地蔵院本と白鶴美術館本に共通する要素は「地蔵院本の原本」および「十巻本の祖本」を介在して伝えられたと考えられ、同様に地蔵院本とA本に共通する要素も、この二本を介在して伝えられたと考えることができる。そして、右のようにして「十巻本の祖本」の内容を推考すると、地蔵院本の大部分は白鶴美術館本と強い相似関係にあり、A本とは異なることから、この「祖本」の大部分も白鶴美術館本に相似し、ごく一部がA本に相似するといった様相が浮かび上がって来る。

ところで、A本と白鶴美術館本に先行する「十巻本の祖本」の存在については、既に鹿島繭氏が『仏教芸術』第二一四号掲載論文で提唱しており、[注18] 本稿は結果的には鹿島説を支持するものである。しかし、鹿島氏の論証方法には幾つかの不備な箇所があり、その点は、数ある「弘法大師伝絵巻」の今後の研究のためにも、やはり指摘しておく必要があると思われる。なお鹿島氏は、本稿がA本と称した三大寺家旧蔵本およびボストン美術館本を一括して「三大寺本系」と称しているので、ここでは、これに従うこととする。

鹿島論文は、十巻本における三大寺本系の位置づけを行うことを目的とし、これと白鶴美術館本の比較を試みたものである。比較方法は三大寺本系と白鶴美術館本の詞書の異同部分を列挙することが中心であるが、前稿2の最後で述べたように、個々の事例についての具体的な説明が乏しく、呈示された資料と結論の関係が明瞭であるとは言い難い。また、画面については、三大寺本系の場面内容を簡単に説明するのみで、他本との異同内容への言及が少ない。しかし、それらはともかくとして、鹿島論文の最も大きな不備は、六巻本が十巻本に先行することを認めながら（四十二頁）、六巻本の唯一の現存作品である地蔵院本についての言及が一切なされていない点にある。

鹿島論文の結論は終章の「五　まとめ」で、次のように述べられている。「両本ともに詞書を書写する際におかした誤謬を見いだすことができた。例えば三大寺本系（ボストン美術館本）第七巻　第三段　丹生託宣事　は、途中で詞書が終っており、また料紙は継ぎ目ではなく余白があるので、書写を中止してしまったことなどがわかった。さらに、白鶴美術館本にも第三巻　第六段　恵果御入滅事　（第七段）恵果影現事　のように三大寺本系のほうが一層詳しい詞書になっている段もある。この両本のどちらが先に制作されたかを考えた結果―両本に先行して十巻本の祖本があったとほぼ確信するに至ったのである。」（五十二～五十三頁）このうち、ボストン美術館所蔵の第七巻第三段についての指摘はその通りであり、問題はない。補足して言えば、白鶴美術館本の詞書は地蔵院本とほぼ一致しており、三大寺本系がその後半部を省略したことは明らかである。しかし、白鶴美術館本第三巻の第六段および第七段については、やや問題がある。この点を少し詳しく述べてみよう。

この部分は実のところ文意が分かりにくいが、前後の文脈から推察すると、両本の「誤謬」の例として、まず三大寺本系の第七巻第三段における詞書の省略を挙げ、次に白鶴美術館本の第三巻第六段と第七段を挙げたものと思われる。したがって「三大寺本系のほうが一層詳しい詞書になっている段もある」ことが、白鶴美術館本の側の誤謬であるという意味に受け取れる。この考え方の基底には、三大寺本系の詞書に含まれる「一層詳しい」内容を、白鶴美術館本が誤って書き漏らしたという暗黙の了解があるように見えるが、[注19] そう判断するための論拠は何も示されていない。第三巻の詞書については、そのまとめの部分でも「この両本の詞書の異同は、三大寺本系の詞書のほうが白鶴美術館本より丁寧である。しかし、このことだけで三大寺本系が古く、これを白鶴美術館本が書写したとは考えられない。なぜならば、三大寺本系にも書写誤りをみることができるからである。」（四十八頁）と述べている。一見すると「丁寧である」ということだけで「三大寺本系が古く、これを白鶴美術館本が書写した」と考えてはいけないと言っているように見えるが、その理由は「三大寺本系にも書写誤りをみることができる」というものであり、意図するところは先の結論と同じである。

では、仮に三大寺本系に「書写誤り」がなかったならば、「丁寧である」という理由だけで「三大寺本系が古く、これを白鶴美術館本が書写した」と考えることができるのであろうか。また、先の結論の部分に置き換えるならば、三大寺本系に誤謬がなければ「一層詳しい詞書」を持つという理由で、これが白鶴美術館本に先行すると言えるのであろうか。鹿島論文の文脈はこれを肯定するものであるが、筆者は否と考える。なぜなら、後から制作されたものが他の要素を付加して詳しくなる場合もあるはずであり、「丁寧で」「詳しい」ことは、それだけでは先後関係の決定要因にはなり得ないと思うからである。

さて、ここで必要なのは、三大寺本系の「丁寧」で「詳しい」内容が何によるものかという視点である。それが独自に加味されたもので

なく、想定しようとする両者共通の祖本に由来するものであるという論証があってはじめて、それを欠くことが白鶴美術館本の誤謬と認められるのであり、そこからようやく「祖本」想定の可能性が開けることになるのである。言うまでもなく、本稿で指摘したように、その一部は地蔵院本を比較対象に加えることによって解決されるが、[注20] 先述の如く鹿島論文では地蔵院本の存在は全く無視されている。

また、鹿島論文は想定した「十巻本の祖本」と三大寺本系および白鶴美術館本の関係について「これらのことから、既に亡失したと思われる十巻本の祖本を、かなり忠実に写し伝えた系統の一本が白鶴美術館本であり、かなり転写に際し改変されて伝わったものが三大寺系本『高野大師行状絵』であるということができよう。」（五十六頁）と述べる。しかし、想定した「祖本」の内容については何の言及もない。それなのに何故、二者を比較しただけで、一方が「祖本」に「忠実」であり、他方が「改変」されていると判断できるのであろうか。理由として挙げられている「これらのこと」が指示する内容は、三大寺本系は「十巻本のなかでも特殊で類本がなく、殊に絵の表現については白鶴美術館本と子細に比較すると、（中略）、そのもとの図柄はきわめて見いだし難い。」および「詞書については、旧三大寺本系の僅かな異同に対して類似を示す本が見当たらない」であると思われる。それは確かに大筋では当たっているが、[注21] このような三大寺本系に対し、白鶴美術館本は大部分が地蔵院本に一致し、それ故に想定した祖本にも一致する可能性が高いと推定されるという文脈を経て、ようやく白鶴美術館本が祖本に「忠実」であり、三大寺本系は祖本をかなり「改変」していると言えるのである。ところが、鹿島論文は地蔵院本への言及を欠いているために、ここでも論拠が曖昧になっていると言わざるを得ない。なお、本稿は決して鹿島論文の結論を否定するものではなく、それに賛同するものである。ここで問題としたのは、結果ではなく、そこへ至るための論証方法であることを明記しておく。

ついでながら、もう一点挙げると、鹿島論文は「一　三大寺本系高野大師行状絵の問題点」の中で「ここでの問題は、十巻のうち、第一種の奥書等の年記を伴わない三大寺本系が、梅津次郎氏の研究によって、第二種の元応元年の奥書を有する白鶴美術館本より先に制作を位置付けられていることにある。三大寺本系は十巻本系統最古の伝本とされながら、その明確な理由についてはふれられなかった。」（四十頁）と言う。確かに、梅津氏は「管見によれば、斯本は前記元応本高野大師行状図画系統の現存最古の伝本と考へられるもの」であると述べているが、[注22] それは白鶴美術館本が公刊された昭和五十六年を遙かに遡る昭和二十九年のことである。それまで梅津氏が元応本系統の作品として考察対象に用いていたものは、延暦寺本（応永十四年、一四〇七年）等の室町時代の転写本であり、ここで述べられているのは、それらよりも三大寺本系の方が古いということであって、決して白鶴美術館本よりも古いとか、元応元年（一三一九）よりも古いということではない。梅津氏の考えは、三大寺本系の製作時期を「この系統の十巻本が成立したと考へられる元応元年以後、東寺本成立の永和四年の間に於いて比較的東寺本に近い頃の製作と考へて大過なく」と述べるところでも明らかである。したがって、梅津氏の言説を、三大寺本系を白鶴美術館本よりも先に位置づけたものと見るのは鹿島論文の誤解である。梅津氏の指摘は、白鶴美術館本が知られていなかった当時としては、極めて正当な判断であったと筆者は考えている。

さて、最後にB本とフリア本の詞書について見ておきたい。まず、B本の一部と校合してみよう（右に地蔵院本および白鶴美術館本との異同、左にB本との異同を示す）。

⑪第一巻1「誕生事」（一～五行目）

夫大師は光仁天皇・御宇宝亀五年に誕生
（書写山根本）
し給へり。讃州・多度・郡屏風の浦の人なり。
（地白―たま）（地白―の）（地白―也）
其父・佐伯の真氏と申き。昔天照大神
天磐戸を閉給し時、天津児屋根の尊はかり
（おまのいはとをとちたまひけるあまつこやねのみこと）
ことをめぐらして
（白―事）

⑫第一巻2「幼稚遊戯事」（三～四行目）

然る父母にもかたらせ
（地白―しかれども）
たまはず。
（※1 地白―給）

※1　しかれどもこれをほかにもらさず、かるがゆへに人しることなし

⑬第一巻3「四天王執蓋事」（二十一行目）

故民のうれへといふ・愁を・聞食・けり。
（地―とふ）（※1 地白―うれ丸）（地白―し）
（このゆへにたみ）（※2 そうれへ）（をとふ）（もきこしめされ）

※1　地―御使を国々へつかはして吏の不善をもたゝし民の

※2　御使を国々へつかはされて吏の不善をもたゝしたみの

B本には、内題、序文、目次、各段標題が現存せず、これらは当初からなかったと推測される。地蔵院本、白鶴美術館本、A本では、序文の中に「高野根本高祖弘法大師」という名称がでてくるが、B本の第一巻第一段の書き出しに、それに準じた「高野山根本大師」の名称が用いられているのは、そのためであろう。また、この三例を一見して分かるように平仮名が多用されており、そのほか⑫のようにB本が独り異なる文言となる例も見られる。したがって、事蹟の内容には大差ないが、A本との直接的な関連は認め難い。なお⑬は前稿1でも引用した箇所であるが、※1・2を見るとA本と白鶴美術館本が欠く「御使」以下の文言をB本も有しており、この点はB本と地蔵院本の親近性を窺わせるものとして注目される。

次は、フリア本の一部と校合してみよう（右に地蔵院本および白鶴美術館本との異同、左にフリア本との異同を示す）。

⑭第三巻1「渡天見仏事」（一～四行目）

大師在唐の時、常に霊山に昇て如来の
（地―のぼり、白―いたり）
真容をおがみたてまつらむことをねが
（地白―事）
はせ給けるに、或時一人の神童忽に来る。
（地白―れり）
（地白―玄奏）（地―甚）（地白―神）（地―神）
・甚・あやし、世の常の人にあらず。
（そのすがた）

⑮第三巻2「在唐入壇事」（九～十二行目）

四輩の弟子これ
（白―ナシ）（地―是）
を仰て密蔵を学ぶ。忽に大師・を見たて
（白―ナシ）（地―す）（地―愛）（※1 地・白―御覧じ）（※2 御覧じ）
まつりて咲を含て・にのたまはく
（地―ナシ）（地―悦て）（地―給よ、白―給はく）
（ナシ）（ふくみ悦をなして）

※1　地―のまいらせ給、白―のまいらせ給ふ

※2　のまいらせ給たる

段の構成に大きな異同があること、および4「守敏遣護法事」の一部に省略があることは、本稿のはじめの方で述べた通りである。それ

以外は、微妙な異同は多く見られるものの、事蹟の内容には大差ない。その中では、⑮の一～二行目は白鶴美術館本が欠く文言をフリア本が有する例として注目される。また、先述の②の※1・2に相当する部分を見ると、フリア本にも「ときに山ひゝくこと雲中の雷のごとし」の文言があり、A本よりも地蔵院本、白鶴美術館本に近いことを窺わせる。これらのことを考え併せると、フリア本の詞書は地蔵院本に最も近いもののように思われる。何れにしても、B本同様、A本との間に直接的な関係は認められない。

さて、このようにB本、フリア本ともに、詞書においてはA本への影響を考えることはできそうにないと思われる。しかし一方、この二本の詞書が地蔵院本への親近性を示していることは、大いに注目される。これらの端本は、十巻本における増補事蹟を含んでいないことから、六巻本の異本と考えられているが[注23]、そうであるならば、その存在は、十三世紀末から十四世紀初め頃の時期に、地蔵院本以外の六巻本が存在したことを示す重要な資料となるからである。それは、同時に他にも同様の作品が存在した可能性を膨らませるものであり、現存作品に先行する作品群の存在を予測させるものでもあろう。残念ながら、B本、フリア本には、詞書の上での関連は認められなかったが、既に述べてきたように図様の上では共通性を見い出すことができる。このような先行諸本の影響を受けながら、次に十巻本が生成されていくのであろう。

結　語

本稿では、まず、前稿に引続き第三巻の図様を類本と比較した。その結果、第二巻と同様にA本の独自性が強いことが認められた。また、フリア本については、図様上の関連は認められないが、一部に内容的な類似性があることを指摘し、これを新たにA本に先行する作品の一つとして加えた。次いで、詞書の再検討から、前稿1で保留した「現存しない作品への推論」を行い、A本と白鶴美術館本に共通する十巻本の祖本の存在を想定した。

さて、数ある「弘法大師伝絵巻」の系統的研究においては、白鶴美術館本以前に十巻本があったとする小考は、ささやかな前進と言えるかもしれない。しかし、翻ってA本成立の問題に目を向けると、A本の多くの部分、特に図様の大半は、ここで想定した「十巻本の祖本」からも逸脱した内容になっていることに改めて気付く。すなわち地蔵院本と白鶴美術館本が一致し、A本が独り異なる部分は、そのまま「十巻本の祖本」とA本の間の異同として残されているのである。したがってA本にとっては、「十巻本の祖本」想定によって解決される問題は、実はあまり多くないというのが実状である。その点で、A本はやはり前稿1で指摘した如く「十巻本の改訂版」と言うにふさわしい作品であろう。そして、その改訂の内容、つまり「十巻本の祖本」から「逸脱した内容」の検討こそが、A本研究にとっての真の課題であると思われる。一連の拙稿は、それに近付くための一つの試みであり、続稿では第四巻と第五巻の復原および検討を行う予定である。

〈注〉

（1）拙稿「三大寺家旧蔵『高野大師行状絵』考―逸翁美術館本を中心に」武田恒夫先生古稀記念会編『美術史の断面』所収、清文堂、平成七年一月。同「三大寺家旧蔵『高野大師行状絵』考―総持寺本を中心に―」『奈良大学紀要』第二十三号、平成七年三月。なお、順に前稿1・2と称する。

（2）拙稿「三大寺家旧蔵『高野大師行状絵』考―第四巻と第五巻を中心に―」『フィロカリア』第十三号、大阪大学文学部美学科刊、平成七年九月脱稿、平成八年三月刊行予定。

（3）地蔵院本は、第一巻は江戸時代の模本であり、それ以外も白鶴美術館本

より制作時期が降る転写本である可能性が高い作品である。しかし、他に六巻本の現存作品はないので、ここでは前稿1と同様に、これを地蔵院本の原本の代用として扱うこととする。

（4）フリア本については次の論考参照。宮次男、論文1「井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について」『美術研究』第二三二号、昭和三十九年、論文2「在米の弘法大師伝絵巻について」『原色日本の美術27在外美術（絵画）』小学館、昭和五十五年。真保亨「弘法大師伝絵巻」『新修日本絵巻物全集』別巻一、角川書店、昭和五十五年。

（5）比較作品の全図は以下の図書参照。地蔵院本―山本智教・真鍋俊照監修『高野大師行状図画』（大法輪閣美術部、平成二年）、白鶴美術館本―梅津次郎編『弘法大師伝絵巻』（角川書店、昭和五十八年）、フリア本―島田修二郎編『新修日本絵巻物全集』別巻一―（角川書店、昭和五十五年）。

（6）フリア本には欠失箇所、また補彩を施した箇所があるが、それについては注4宮論文1および注5掲載図書参照。

（7）着衣の色が大師の通常の色と異なる点、また面貌が大師よりも後出の恵果に似ている点から、このように判断した。

（8）この段の絵と次の5「道具相承事」の詞書の間には、料紙半枚程度の余白がある。第21紙の右半に当たる部分であるが、この料紙の右端には、恵果と大師がいる建物の基壇の端がかかっているので、制作当初からこの状態であったことは明白である。前稿2、一五二―一五三頁参照。

（9）この段の絵の料紙（第23紙）は、横の長さが四十三・九センチと標準よりも四～五センチ短く、料紙表面左上隅にあるはずの料紙番号も欠いていることから、左端が切除されている可能性がある（前稿2、一五二―一五三頁参照）。しかし、仮にそうであるとしても、第二段から第七段までの建物の周囲には、樹木草花等の添景は一切描かれていないので、ここに、そのような添景を想定するのはかえって不自然である。したがって、この段の絵は現状で完結していると考えておきたい。なお、次の第24紙の右端にも約九センチの余白がある。

（10）この段の絵の最後の料紙（第34紙）は、横の長さが十一・〇センチと標準よりも極端に短く、料紙左上隅にあるはずの料紙番号も欠いていることから、左端が切除されている可能性がある（前稿2、一五二―一五三頁参照）。しかし、注8で述べた5「道具相承事」の場合と同様に、絵は現状で完結していると考えておきたい。なお、次の第35紙の右端にも約三センチの余白がある。

（11）A本では、第二巻第五段以降も唐土を舞台とする事蹟であるが、そこに描かれている建物は福州の「仮屋」と長安の王宮のみである。唐の寺院を描くのは第三巻だけである。

（12）白鶴美術館本で朱塗りの柱が見られるのは、唐を舞台とする事蹟の段のほかは、寺院の門や塔、および第五巻第二段「稲荷契約事」の東寺の金堂だけであり、寺院の住房には皆無である。

（13）白鶴美術館本では、このほか第四巻第六段「槇尾寺」、第七巻第八段「東大寺蜂」、第八巻第七段「皇嘉門額」に鴨居の上部が見える表現がある。しかし、そこから室内が見えるわけではなく、吹抜屋台と見るには不完全な表現である。

（14）梅津次郎「池田家蔵弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」『美術研究』第七八号、昭和十三年。同「地蔵院本高野大師行状図画―六巻本と元応本との関係―」『美術研究』第八三号、昭和十三年。ともに『絵巻物叢考』（中央公論美術出版社、昭和四十三年）所収。

（15）拙稿「弘法大師伝絵巻の諸問題」『国際交流美術史研究会第八回シンポジアム説話美術』国際交流美術史研究会、平成二年三月。

（16）このほか白鶴美術館本に見られる大きな異同としては、③の例の最終行の「独かなしむ」の後に「。」が打たれ、その右に詞書と同筆と思われる筆跡で「にはあらず雙樹林の昔の憂に似たるをや」と小さく傍書されているのが挙げられる。これは他二本にはない文言であり、白鶴美術館本が独

自の資料によって補ったものと推定される。

(17) 前稿1の八十三頁、前稿2の一五四頁参照。

(18) 鹿島繭「三大寺本系高野大師行状絵について」『仏教芸術』二一四号、平成六年五月。

(19) 校合の③～⑥に見られるような白鶴美術館本が他二本の文言を書き漏らした例については、鹿島論文の考えは確かに当たっている。しかし、それは地蔵院本と照合した上で言えることであるという点を、筆者は問題としているのである。

(20) 地蔵院本を比較対象に加えることによって解決されるのは、地蔵院本と三大寺本系が一致し、白鶴美術館本が独り異なる部分である。ところが、三大寺本系と白鶴美術館本に見られる異同の多くは、実は地蔵院本と白鶴美術館本が一致し、三大寺本系が独り異なるものであるから、この部分については、祖本を想定しても三大寺本系の独自性の説明にはならない。

(21) 鹿島論文は、フリア本については三大寺本系との場面内容の類似性を指摘しているが、拙稿が取り上げた地蔵院本およびB本については言及がない。

(22) 梅津次郎「高野大師行状絵の零巻について」『国華』七五二号、昭和二十九年、三三四頁。

(23) 真保亨「弘法大師伝絵巻―六巻本をめぐって―」『仏教芸術』五七号、昭和四十年。

（付記）

本稿をなすにあたり、藪本荘五郎氏、白鶴美術館の山中理氏のお世話になりました。記して謝意を表します。

（下へ続く）

図１　Ａ本　第一段　渡天見仏事

（下へ続く）

（左へ続く）

図２　Ａ本　第二段　在唐入壇事

（左へ続く）

図４　Ａ本　第三段　珍賀怨念事

（右頁二段目へ続く）

図 3　白鶴美術館本　第二段　大師御入壇事（右端省略）

図5　A本　第四段　守敏遣護法事

図7　A本　第五段　道具相承事

図9　A本　第六段　恵果御入滅事

図6　白鶴美術館本　第四段　守敏遣護法事

図8　白鶴美術館本　第五段　道具相承事

図10　白鶴美術館本　第六段　恵果御入滅事

図11　A本　第七段　恵果影現事

図12　A本　第八段　投三鈷事

「高野大師行状絵」料紙寸法表（cm）

（測定　塩出）

巻	第一巻		第二巻		第三巻	
縦		32.1		32.3		32.2
料紙	段	横	段	横	段	横
1	序文	47.9	1 詞・絵	47.6	1 詞	48.6
2	序文	48.0	1 絵	47.8	1 詞	49.0
3	序文	46.8	2 詞	48.0	1 詞・絵	48.6
4	序文1詞・絵	48.6	2 詞	48.0	1 絵	48.6
5	1 絵	46.6	2 絵	48.2	1 絵	48.7
6	1 絵	46.0	2 絵 3 詞	48.0	1 絵	47.2
7	1 絵 2 詞	48.7	3 詞・絵	48.2	1 絵	48.8
8	2 詞・絵	48.0	3 絵	48.4	2 詞	49.0
9	2 絵	48.2	3 絵 4 詞	48.8	2 詞	49.0
10	2 絵	48.6	4 詞・絵	46.2	2 詞	47.0
11	3 詞	49.1	4 絵	46.6	2 詞	49.0
12	3 詞・絵	48.6	4 絵	48.2	2 詞・絵	49.3
13	3 絵	46.9	4 絵 5 詞	46.8	2 絵	49.1
14	3 絵	48.5	5 詞・絵	47.3	2 絵	46.7
15	3 絵	48.6	5 絵	48.2	2 絵 3 詞	49.2
16	4 詞・絵	48.3	5 絵	46.4	3 詞・絵	49.1
17	4 絵	45.8	5 絵	48.2	3 絵	46.9
18	5 詞・絵	48.0	5 絵	48.5	3 絵	47.0
19	5 絵	48.0	5 絵	49.2	4 詞・絵	49.2
20	5 絵	48.5	5 絵 6 詞	48.0	4 絵	48.8
21	5 絵	46.1	6 詞・絵	47.5	4 絵 5 詞	49.4
22	6 詞	48.0	6 絵	29.2	5 詞・絵	49.1
23	6 詞・絵	48.6	7 詞	35.2	5 絵	43.9
24	6 絵 7 詞	48.2	7 絵	48.6	6 詞	48.8
25	7 詞・絵	46.4	7 絵	48.4	6 詞	49.0
26	7絵8詞・絵	48.4	7 絵	48.2	6 詞	47.4
27	8 絵 9 詞	48.5	7 絵	48.8	6 詞	49.0
28	9 詞・絵	48.6	7 絵	30.2	6 詞	48.8
29	9 絵10詞	48.6	8 詞	49.0	6 詞・絵	※1 48.5
30	10詞・絵	49.1	8 詞・絵	48.8	6 絵	49.1
31	10 絵	48.5	8 絵	49.1	7 詞	49.0
32	10 絵	48.1	8 絵	42.8	7 詞・絵	49.0
33			9 詞	42.8	7 絵	48.7
34			9 詞・絵	48.7	7 絵	11.0
35			9 絵	46.5	8 詞	48.0
36			9 絵	23.0	8 詞・絵	47.1
37					8 絵	49.0
	合計	1,534.8	合計	1,643.4	合計	1,753.6

※1　第三巻第29紙は途中に切れ目があり、詞28.2cm、絵20.3cmであるが、表面左上隅に付された料紙番号により、本来は一紙であったと判断した（前稿2の注6参照）。

On the *Kōya Daishi Gyōjō-e*, Formerly in the Sandaiji Family Collection
—Concerning the work in the Yabumoto Collection—

Kimiko SHIODE

This set of narrative scrolls is made up of the first five scrolls from the original set of ten in the *Kōya Daishi Gyōjō-e*. In previous papers, the author considered the set as a whole and also the style of the first and second scrolls. This paper examines the third scroll, at present in the Yabumoto Collection.

Firstly, upon stylistic comparison with other versions of the third scroll (the Jizōin version, the Hakutsuru Fine Art Museum version, and the Freer Gallery of Art version), it was found that the Yabumoto scroll has little similarity to the Jizōin or Hakutsuru versions and that it has a strong individual character, like the second scroll of this set. Comparison with the Freer version shows a similarity in the content of the paintings of one part only.

Secondly, comparison of the text with other versions shows that the Yabumoto scroll has differences to the Jizōin and the Hakutsuru versions, which show many mutual similarities. There are some partial similarities between the Yabumoto scroll and the Jizōin version, however, and there are some omissions and other errors in the Hakutsuru version. Working on the premise that the Jizōin version as the representative six-scroll set was completed earlier the ten-scroll sets such as the Sandaiji and the Hakutsuru versions, the author hypothesizes that there was an original ten-scroll set common to both versions. This theory may be simplified in the following way:

Original of the Jizōin version
- the Jizōin version
- Orijginal ten-scroll set
  - the Hakuturu version
  - the Sandaiji version

However, as there are many similarities between the Jizōin and Hakutsuru versions and little concurrence between the Sandaiji and Jizōin versions, it may be concluded that the hypothetical ten-scroll set "original" was similar in the main to the Hakutsuru version. The sandaiji set, as the author poited out in previous papers, should be classified as a "revised version" set of ten narrative scrolls.